

野菜主要病害の発生の特徴と対応

2015年は早春と晩秋に降雨が多く、キャベツの菌核病、タマネギの細菌性病害が多発し、レタスやホウレンソウではべと病の発生が見られた。共通した防除対策としては早めの薬剤防除や圃場の排水性をよくすることである。

内容

2015年春においては降雨が多く、神戸、東播磨、淡路地域において、キャベツ菌核病（表紙写真）の発生が多く見られ、4月に病害虫発生予察注意報を発表した。近年、飼料稲やホールクロップサイレージ（WCS）の普及により湛水期間が短縮されつつあり、湛水による菌核の死滅があまり期待できないことが多発生につながると考えられる。対策としては、薬剤防除による予防と、菌核を圃場内に残さないように発病株を持ち出すことが重要である。しかし、常発圃場では菌核密度が高いため、生物農薬のコニオチリウム剤を用いて菌核を死滅させる防除法もある。

また、2015年春、タマネギ細菌性病害（腐敗病）（写真1）の発生が目立ち、過去10年間で最も多い発生となった。4月に病害虫発生予察注意報を発表した。対策としては伝染源となる腐敗株の早期抜き取り、圃場の排水対策の徹底、早期の薬剤防除である。



写真1 タマネギ腐敗病で黄変した株（中央）

トマトでは近年、すすかび病とうどんこ病の発生が増加しつつある。ピラクロストロビン・ボスカリド水和剤などが両病害に使用でき効果も高い。

2015年度は春に多種の野菜でべと病の発生が目立った。淡路ではタマネギべと病の発生が多く、近年少発生であったレタスべと病（写真2）も、一部の地域で発生が見られ、さらに秋にも発生した。また、ホウレンソウべと病はレース10までの抵抗性を持つ品種にもかかわらず、発病が見つかった。対策は抵抗性品種の導入のみに頼らず、予防を中心とした薬剤散布も並行して行うことが重要である。

今後の方針

菌核病は、現地では水稻後作でも発病が見られる。現在、原因究明中であり、耕種的防除技術の向上を図っていく。

松浦 克成（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2448）



写真2 レタスべと病の病徴